

-大学院歯学独立研究科-
第 102 回 中 間 発 表 会 プ ロ グ ラ ム

大学院学生等が、これまでの研究成果を発表します。
 どなたでも聴講できますので、多数の参加をお待ちしております (聴講申込不要)

場 所：実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナー室

日 時：2019 年 6 月 26 日 (水) 17 時 25 分 開会

—2019 年 6 月 26 日 (水) —

No.	発表区分・予定時間	演題名・発表者	審査委員
	17:25	開会挨拶 山田研究科長	
1	[中間発表] 17:30~18:00 司会:山田 教授	「片側唇顎口蓋裂患者のスマイル時の口唇・頬部運動の三次元的解析」 檜本達也 3年 硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学	主査:増田教授 副査:各務教授 :亀山教授
2	[中間発表] 18:00~18:30 司会:山田 教授	「骨格性下顎前突者の随意的口唇閉鎖調節能力」 丸山歩美 3年 硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学	主査:長谷川教授 副査:北川教授 :芳澤教授
3	[中間発表] 18:30~19:00 司会:小笠原 教授	「歯科衛生士の就業継続意思に影響する要因 —外的・内的キャリアとの関連性—」 上浦 環 4年 健康増進口腔科学講座 医療経営政策学	主査:藪島教授 副査:安西教授 :正村准教授

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1707	入学年 Entrance Year	2017 年 Year
(ふりがな)	ならもと たつや		
氏名 Name in Full	檜本 達也		
専攻分野 Major Field	硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学		
主指導教員 Chief Academic Advisor	山田一尋		
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society		
演題名 / Title of Presentation			
片側性唇顎口蓋裂患者のスマイル時の口唇・頬部運動の三次元的解析			
発表要旨 / Abstract			
<p>【目的】唇顎口蓋裂患者の口唇形成術後の静的な顔貌については、様々な解析が行われ、形態の改善が示されている。しかし、スマイル時の口唇の動きについては不明な点が多い。そこで片側性唇顎口蓋裂患者のスマイル時の口唇および頬部の三次元的移動様相について検討した。</p> <p>【方法】松本歯科大学病院育成期口腔診療部門矯正歯科を受診した片側性唇顎口蓋裂患者 8 名(平均年齢 5.4 歳)を対象とした。頭部固定は行わず、安静時とスマイル時の写真をステレオカメラで撮影した。三次元解析ソフトウェア(QM-3000)を用いて、口角、頬部および上下唇中央の三次元的移動距離を計測し、患側と健側の移動量を、Wilcoxon 検定を用いて比較、検討した。なお、本研究は松本歯科大学研究等倫理審査委員会にて承認されている。(許可番号第 0252 号)</p> <p>【結果】スマイル時に、患側口角と健側口角は、それぞれ外側に 4.36mm、3.14mm、上方に 3.82mm、2.81mm、後方に 4.36mm、2.92mm 移動し、いずれも患側が健側と比べ、有意に大きい値を示した。一方、頬部は患側と健側の移動距離に有意差はなかった。上唇中央部と下唇中央部では、垂直方向において、それぞれ上方に 2.19mm、下方に 6.21mm 移動し、有意差を示した。</p> <p>【考察】口唇裂は手術後、形態は修復されるが、瘢痕組織を形成する。スマイル時には、口輪筋を停止部として大頬骨筋、口角挙筋などが収縮する。その際に、片側性唇顎口蓋裂患者では、上唇の瘢痕組織が患側よりに位置するため、口角部で口輪筋の抵抗力は患側が健側より小さくなり、患側口角が上外後方へ大きく移動したと推察された。</p> <p>【結論】片側性唇顎口蓋裂患者の口唇運動の三次元的解析から、患側口角が健側口角よりも上外後方へ大きく移動し、非対称性のスマイルが示された。</p>			

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1708	入学年 Entrance Year	2017 年 Year
(ふりがな)	まるやま		あゆみ
氏名 Name in Full	丸山		歩美
専攻分野 Major Field	硬組織疾患制御再建学講座 臨床病態評価学		
主指導教員 Chief Academic Advisor	山田		一尋
発表会区分 Type of Meeting	中間発表会 ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation / The Matsumoto Dental University Society		
演題名 / Title of Presentation			
骨格性下顎前突者の随意的口唇閉鎖調節能力			
発表要旨 / Abstract			
<p>【目的】 口唇閉鎖能力は、不正咬合に関連することから、古くから研究されてきた。これまでの研究では、最大口唇閉鎖力と歯列、顔面形態の関連が示されている。一方、日常では最大口唇閉鎖力が加わることは少なく、随意的口唇閉鎖能力が使用されている。正常咬合者では、多方位口唇閉鎖力測定装置を用いた研究から、上下方向の随意的口唇閉鎖能力の調節能力が高いことが示されている。しかし、不正咬合者の随意的口唇閉鎖能力については検討されていない。そこで、本研究では、骨格性下顎前突者の随意的口唇閉鎖力を多方位口唇閉鎖力測定装置を用いて検討した。</p> <p>【方法】 被験者は、松本歯科大学育成期口腔診療部門矯正歯科を受診した、外科的矯正治療を施行する骨格性下顎前突者成人女性 10 名(平均年齢:20.0±4.6 歳)と個性正常咬合者成人女性 9 名(平均年齢:23.5±4.9 歳)とした。多方位口唇閉鎖力測定装置を用いて最大口唇閉鎖力と 50%随意的口唇閉鎖力を測定した。随意的口唇閉鎖力の測定では、多方位口唇閉鎖力測定装置に接続したディスプレイに最大口唇閉鎖力の 50%の表示点灯後、目標に 6 秒間の維持を指示した。50%目標値から± 8%範囲内の時間の割合を正確率として、口唇閉鎖調節能力を検討した。</p> <p>【結果】 最大口唇閉鎖力は、骨格性下顎前突者と個性正常咬合者で有意差はみられなかった。50%随意的口唇閉鎖能力の正確率は、骨格性下顎前突者と個性正常咬合者共に上下唇中央部で高い正確率を示した。下唇中央と下唇右側では、骨格性下顎前突者は個性正常咬合者に比べ有意に小さい 50%正確率を示した。</p> <p>【考察】 骨格性下顎前突症では下顎が前方位にあるため、下唇では最大の力で閉鎖する単純な動きに比べ、随意的な調節する能力は低いと推察された。</p>			

発表内容の要旨(課程博士)
Abstract of Presented Research (For the Doctoral Course)

学籍番号 Student ID No.	ID#G 1602	入学年 Entrance Year	2016 年 Year
(ふりがな)	かみ うら たまき		
氏名 Name in Full	上 浦 環		
専攻分野 Major Field	健康増進口腔科学講座 医療経営政策学		
主指導教員 Chief Academic Advisor	小笠原 正		
発表会区分 Type of Meeting	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">中間発表会</div> ・ 大学院研究科発表会 ・ 松本歯科大学学会 <small>Midterm Meeting / Graduate school research meeting presentation /The Matsumoto Dental University Society</small>		
演題名 / Title of Presentation			
歯科衛生士の就業継続意思に影響する要因 —外的・内的キャリアとの関連性—			
発表要旨 / Abstract			
<p>【目的】 仕事をする目的は、お金や地位などの外的キャリアと、仕事に対する動機・能力・価値観などの内的キャリアが関与している¹⁾。これまで、歯科衛生士の離職や復職と、外的キャリア・内的キャリアに関する研究はあるが就業継続要因は明らかにされていない。そこで本研究は、歯科衛生士の就業継続支援の指針を得るために、就業継続意思と外的・内的キャリアとの関連について検討した。</p> <p>【対象と方法】 長野県内の病院及び歯科医院に勤務する歯科衛生士を対象に、郵送または直接回収による質問紙法を実施した。調査期間は2018年5月20日から12月20日であった。調査内容は、対象者の背景(外的キャリア)、内的キャリアに関する質問、職場の実情、就業継続意思の有無とした。内的キャリアの質問は、エドガーH・シャインによる「キャリア指向質問票」40項目¹⁾を使用した。「就業継続意思」と「外的キャリア」、「内的キャリアと職場の実情の一致」との関連をχ^2検定またはFisherの直接確率計算により行った。</p> <p>【結果】 配布106名中71名の回答があった(回収率67.0%)。外的キャリアと継続意思の間に有意差が見られたのは「転職回数(p<0.05)」と「在職年数(p<0.05)」であった。内的キャリアと職場の実情が一致した項目のうち、継続意思と関連が見られたのは3項目であった。また40項目のうち「特に強く思う」と挙げた5項目が2個以上一致した場合に有意な差がみられた。</p> <p>【考察・結論】 歯科衛生士が職場で継続して働きたいと思う要因には内的キャリアも影響することが示唆された。内的キャリアの達成を図るためには個人は客観的分析を行い、その活用を戦略的に実行し、雇用側はそれを把握したのち個人にあった課題を提示する仕組み作りが必要と考えられる。</p> <p>【文献】 1) Edgar, H. S. (金井壽宏, 高橋 潔, 訳): キャリアアンカー 〈I〉セルフアセスメント, p. 1~4, 白桃書房, 東京, 2009.</p>			